

## (別紙) 成果報告書

### 藤枝でお茶・ジビエでおもてなしに関する研究 (増加する訪日外客に対応するための魅力的なおもてなし施策)

静岡産業大学情報学部柯ゼミ・内藤ゼミ  
指導教員：准教授柯麗華・講師内藤旭恵  
参加学生：成岡匠、藤井まみ、山田尚輝、王涵秋、  
李雪婷、小林達矢、小林涼芽

#### 1. 要約

外国人観光客向けの新しい体験型観光プランである「藤枝でお茶・ジビエでおもてなし」を柱として研究を行ってきた。活発的な20代から50代までの体験型ツアーに興味がある外国人をターゲットとし、お茶およびジビエ（鹿・猪）の体験を通じて、静岡独自のおもてなしで誘客する。

#### 2. 研究の目的

2016年の訪日外国人観光客の数は、前年比21.7%増の2,400万人以上に達した。訪日外国人観光客の急激な増加により、観光ニーズの多様化が進行している。訪日外国人の観光行動には、団体客から個人客へ、爆買い・爆飲食から爆体験へとシフトする傾向が見られる。しかし、「観光」中心の既存の観光プランは、彼らのニーズに十分応えることができなくなっている。

そこで、この研究は、藤枝市の外国人観光客誘客に向けた受け入れ態勢を提案し、訪日の主役であるアジア系外国人客を積極的に誘致し、県内での滞在日数や時間を大幅に延長させ、爆体験へと誘導し、地域の活性化につなげることを狙いとしている。

#### 3. 研究の内容

藤枝市瀬戸ノ谷大久保地区と島田市伊久美地区といった中山間地域の空間を利用して、外国人観光客をいかに誘客するのかのといったプランを検討するため、実際に大人が体験して楽しめる内容を実際に行動しながら計画していった。そして、この研究は、「外国人観光客誘客に向けた受け入れ態勢の整備」及び「観光プランの計画」を柱として行った。フェーズⅠで、外国人観光客誘客に向けた受け入れ態勢実態の調査を実施し、フェーズⅡで体験型観光プランを作った。

#### 4. 研究の成果

##### (1) 当初の計画

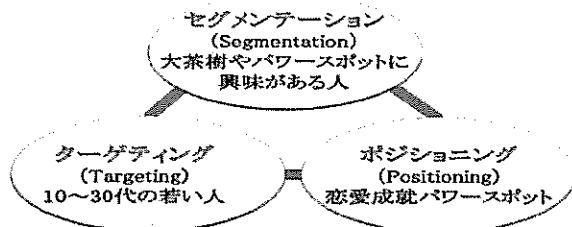
研究は、ほぼ当初の計画の通りで進めた。異なる点としては、まず、日本人観光客向けの「藤枝大茶樹に行こう！」の観光プランを作つてから、その反省点を踏まえて、訪日外国人観光客

のニーズにしっかりと対応できる「藤枝でお茶・ジビエでおもてなし」の体験型観光プランを作ったことである。

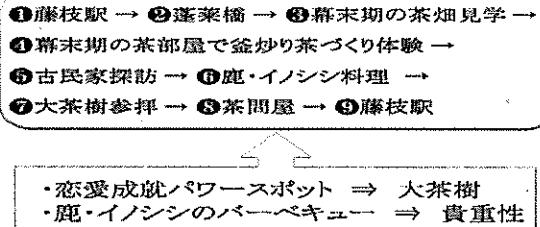
## (2) 実際の内容

日本人若者向けの観光プランである「藤枝大茶樹に行こう！」の内容は以下の通りである。

### 1. 市場参入戦略(STP)



### 2. 観光プラン



### 3. 販売戦略

(1) 価格戦略: ランチ付き日帰り: 4,880円 (税込み)

(2) 販売戦略

- ・若者がよく利用する生協で販売
- ・学生の割引 (学生証で1割引き)
- ・市や藤枝大茶樹のHPからURLで誘導
- ・「ふるさと割」の適用 ...など

(3) プロモーション戦略

- インターネット: SNSや動画広告でアピール
- ・旅行サイトに情報発信

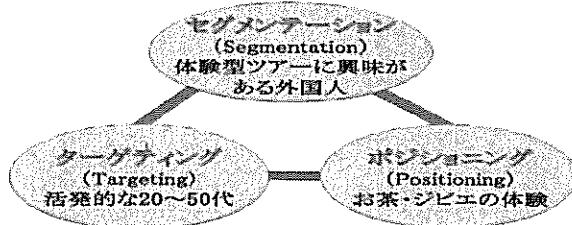
雑誌: フリーペーパー、フリーマガジン

知人: 知り合い、友達に情報発信

そして、外国人観光客向けの観光プランである「藤枝でお茶・ジビエでおもてなし」の内容は、以下の通りである。

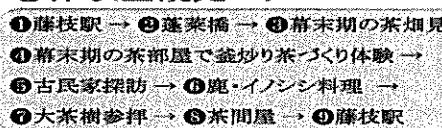
### 1. 販売戦略

#### (1) 市場参入戦略(STP)



#### (2) マーケティング戦略

##### ① 体験型観光プラン



##### ② 価格戦略

4,980円 (BBQランチ付き日帰り)

#### ③ 販売チャネル戦略

- ・提携販路の開拓
- ・旅行・ホテル・交通業者等との提携販売
- ・行政機関の協力
- ・市のHPからURLで誘導

#### ④ プロモーション戦略

- ・外国人観光客に人気の雑誌への掲載
- ・ソーシャルメディアの活用
  - ・SNSや動画広告でアピール
  - ・旅行サイトに情報発信
- ・口コミサイトの利用
- ・旅行ブログ、WeChat、LINEなど

### 2. コストと売上

#### (1) コスト

料金	金額
藤枝駅～島田駅の電車代	200円
島田駅～伊久美二俣のバス代	往復600円
食事	
鹿と猪の料理	2,000円
交通費	+ 食費
	= 一人当たりの費用: 2,800円
広告費	金額
ポスター	申請代: 一回600円
A3 50枚	1,700×50=85,000円

#### (2) 売上

初年度の売上目標単価: 4,980,000円  
(4,980円 × 1,000人)

### (3) 実績・成果と課題

#### ①実績・成果

まず、外国人観光客誘客に向けた受け入れ態勢について、外国人観光客受け入れの現状を調査し、マップ、観光案内板、メニューの多言語対応に関する調査及び分析を行った。藤枝市では、外国人観光客の誘致に積極的であり、関連の多言語対応を実施していることがわかった。しかし、瀬戸ノ谷、大久保、伊久美地区に関しては、観光案内板やメニューの多言語対応は、不十分であり、特に観光案内版の設置を早急に行う必要があると感じた。

次に、外国人をターゲットとする体験型観光プランを企画した。まず、藤枝大茶樹を観光のシンボルとし、瀬戸ノ谷、大久保、伊久美地区に関する観光プランを調査した。そして、40歳以下の日本人の若者を対象に100名のアンケート調査を実施し、その調査結果に基づき、日本人中心のモニターツアーを開催した。日本人向けの体験型観光プランは「藤枝大茶樹に行こう！」で、日本人の若者をターゲットにし、大茶樹を若者に人気の恋愛成就のパワースポットにし、地域の活性につなげる狙いである。

また、この研究の本命である訪日外国人観光客向けの「藤枝でお茶・ジビエでおもてなし」の新しい観光プランを作った。この観光プランを作るために、まず58名の外国人にアンケート調査を実施してから、中国、韓国、ベトナム、インドネシア、ブラジルの各国籍の外国人を招いてモニターツアーを開催した。このツアーは、活動的な20代から50代までの体験型ツアーに興味がある外国人をターゲットとし、お茶およびジビエ（鹿・猪）バーベキューの体験を通じて、静岡独自のおもてなしを実施した。

成果の1つ目としては、瀬戸ノ谷、大久保、伊久美地区のPRに寄与した。瀬戸ノ谷、大久保、伊久美地区や藤枝大茶樹に全く興味や関心のない若い世代の日本人や外国人にアンケートを実施したため、この地域に関心を持ち、私たちが提案した体験型観光プランに参加したいとの高評価を得ることができた。また、モニターツアー参加者による積極的なSNSでの写真投稿により、その情報が拡散され、地域情報の発信を行うことができた。

そして、2つ目は、地域の活性化につながったことである。モニターツアーの開催により、多くの若い日本人や外国人が、この地域に初めて足を運び、在来茶園茶摘み体験、製茶体験、ジビエバーベキュー体験、大茶樹視察、呈茶体験、製茶工場見学を通して、地産地消や現地住民との交流により、この地域の活性化に新しい風を吹き込んだ。

#### ②課題

本来であれば、旅行代理店等と組んで、本格的な観光プランまで成長させる必要があるが、予算の関係上厳しい状況であった。例えば、JTBやレイラインといった代理店に話を持ち掛けたが、海外から外国人観光客を誘客する場合、現地の旅行代理店に対して、宣伝広告費だけでも500万円前後の支払いが必要であり、それ以上の収入が見込めない観光プランは採算が合わないとのご意見を頂戴した。従って、旅行代理店を通して、大々的に観光客を誘客してツアーを催行するためには、多くの障壁が存在するため、オプショナルツアーでの開催や、藤枝おんぱくなどの地域イベントでの設定が現実的である。

#### (4) 今後の改善点や対策

2017年5月、藤枝おんぱくプログラムの開催を予定している。この研究は、藤枝市役所との連携事業としてスタートしたため、ゴールは、藤枝市のイベントの1つとして設定することとなった。今年で4年目を迎える藤枝おんぱくのイベントの1つとして設定し、まずは、地域の人々や地元の方々に参加を募り、プランの評価とプラシアップを進めることとした。2017年5月の2回ツアーを開催し、外国人参加者に具体的な意見を求めることとした。藤枝おんぱくを通して本ツアーを評価し、最終的には、海外からの観光客誘客可能なプランへと成長させる必要がある。

そして、現状では、日帰りのプランとなっているが、地元でお金を使ってもらうためには、一泊してもらい、飲食及び土産を購入させるような仕組み作りが必要である。また、現在、川根温泉経由にして欲しいといったオファーや、志太温泉潮生館での宿泊はどうかといったご意見も頂戴しているため、今後検討する必要がある。

### 5. 地域への提言

外国人観光客を受け入れるために、瀬戸ノ谷、大久保、伊久美地区に関しては、観光案内板やメニューの多言語対応は、不十分であり、特に観光案内版の設置を早急に行う必要がある。また、お茶、シイタケ、温泉、ジビエなどの観光資源をホームページで多言語標記でもっと情報発信すべきだと思う。そして、交通手段・道路や駐車場の整備が必要である。素晴らしい観光資源を持ちながら、行きたくてもバスの本数が少なく、道路が狭く、大型バスの通過が困難な箇所も多くある。大久保キャンプ場の駐車場を除けば、駐車場の整備も不可欠である。

また、現在では、本研究の共同研究者が中心となって運営しているが、プランが軌道に乗り始めたら、地元の人々が積極的に運営をしていく必要がある。このプランで訪問する中山間地域は、限界集落となっている地域も多く、地元住民からは、観光客に来てもらい、スルーして帰ってもらうのではなく、稼ぎ手や担い手、お嫁さんなどに来てもらいたいといった具体的な意見があるため、外国人に限らず、国内の観光客にも来てもらい、魅力を知ってもらった上で、移住してもらえるような施策へしていく必要もある。

### 6. 地域からの評価

この研究に際して、企業や行政などの関連団体の協力をいただいた。地域密着型で長期間に渡るプロジェクトとしてやれるのではないだろうかと期待の声が多く寄せられた。また、中日新聞（「茶で外国人誘客策を研究～静産大ゼミ留学生に体験ツアー」2016年12月20日、朝刊17面）でも取り上げてもらうことができ、注目度の高い体験型観光プランとなった。

日本人学生や留学生の感性で、新しい発想での外国人観光客を誘致し、県内での滞在日数や時間を大幅に延長させ、爆体験へと誘導し、地域の活性化につなげる取組みに一定の評価を得ることができた。

# 川根本町の地域特性を活かした景観計画・景観デザインへの提案

静岡文化芸術大学 デザイン学部 黒田研究室

指導教員：教授 黒田宏治

参加学生：植田満里奈 星野真優 篠崎真実

若井明日香 杉本真衣香

渡辺瑞緒 玉腰ひかる

## 1.本調査の経緯・目的

川根本町は、静岡県中部に位置する町である。大井川上流部に位置し、町域の90%以上が森林という特徴を持つ。年々人口の減少、また高齢化が進む中、観光地としての認識も薄いのが現状である。これを踏まえ、今回は川根本町役場との協力を得、我々学生が地域の魅力向上の提案を目的とした景観計画へ参与した。現地の人々が心地よく感じられ、また外部から訪れる人々が再訪したい、あるいは定住したいと感じられる景観デザインの色彩ガイドラインを、観光客目線、若者目線、またデザインを学ぶ学生目線から調査、提案していく。

## 2.活動内容

### ■実地調査

平成28年9月中旬、同年11月下旬に川根本町現地にて、主要観光地への訪問、茶農家への訪問、またインタビュー調査を含めた実地調査を行った。

観光客として、また学生として見た印象、意見から、現状に対する意見の提供として川根本町の問題点を列挙し、改善点をまとめた調査意見書を作成する（川根本町役場へファイドバック済み）。

### ■ゼミにおける活動

川根本町の客観的データ（人口の推移、観光データ等）を踏まえた上で、実地調査からの考察をディスカッションにて行う。プロセスとして、川根の定点観測記録、また要所の色を抽出し、色のチャート図を作成した。問題点をデザインの視点から列挙し、色彩計画の基本を前提に、川根の色彩の現状から新規色彩ガイドラインを提案する。

## 3.色彩計画における基本的な事項

### ■色彩の与える情緒的效果

人は五感情報からイメージを想起する。中でも視覚は最も発達した五感であり、情報の80%程度が目すなわち視覚からのものだと考えられている。

視覚的に捉えられた物や景観における、色、素材、形状などから、人はイメージを作り上

げていく。その為景観計画を考える際、印象を大きく左右する要因となる、色彩、素材を重点に置く必要がある。配色の調和を図ることで、イメージが統一され秩序ある空間を作り上げることが出来る。

(例) 寒色+ : 都会的でクールな印象

暖色 : 自然的でウォーム、ナチュラルな印象

### ■地域の景観特性に合った色彩景観づくり

基調となる色をそろえ、群としてまとまりのある色彩景観をつくる。屋根や外壁の色彩（明度、彩度）・素材を統一することで、落ち着きのある景観を形成することが出来る。

またイメージから連想した色使いは危険であり、空は青、樹木は緑など、単純なイメージから連想した色使いは景観を損ねる要因になることが多く、自然界の色は、イメージする色より落ち着いていることを認識する。

### ■川根の天候

川根本町は山間部が多いため天候が変化しやすく、日照時間も短い地域が多い。川根本町の一か月の平均日照時間は 105 時間と、県全体と比較しても短い。そのため光量が少なく、町全体が暗くすんだ印象を受ける。

## 4. 実地調査から考察

### ■問題点の指摘・改善への意見（一部抜粋）

千頭駅前



#### ◎好印象

- ・駅舎の側面に木が使用されている

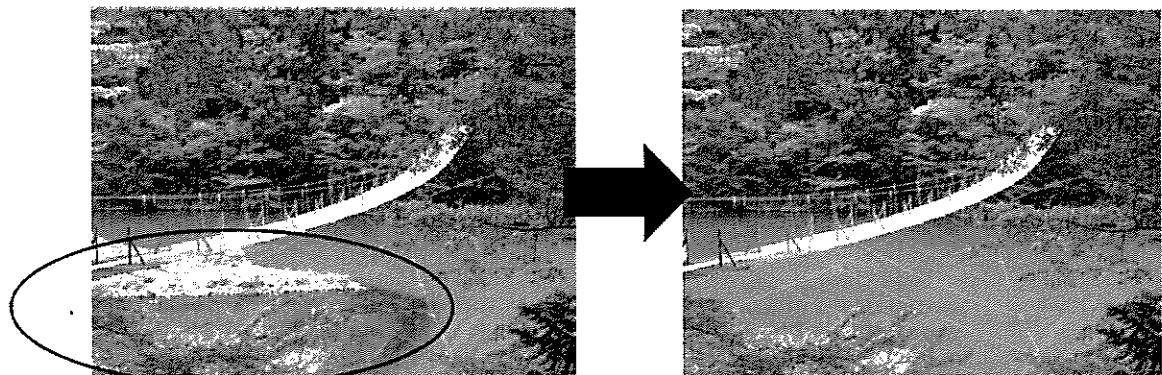
#### ×改善点

- ・地面、建物共に灰色などの暗い色が多く、寒い印象を与える
- ・駅舎に使われている木が古く感じる
- ・駅舎の中の蛍光灯の白い光も、寒い印象に一役買っている
- ・暖色が少ない
- ・駅舎付近、階段などの黒カビが汚い

## ■問題点への改善案

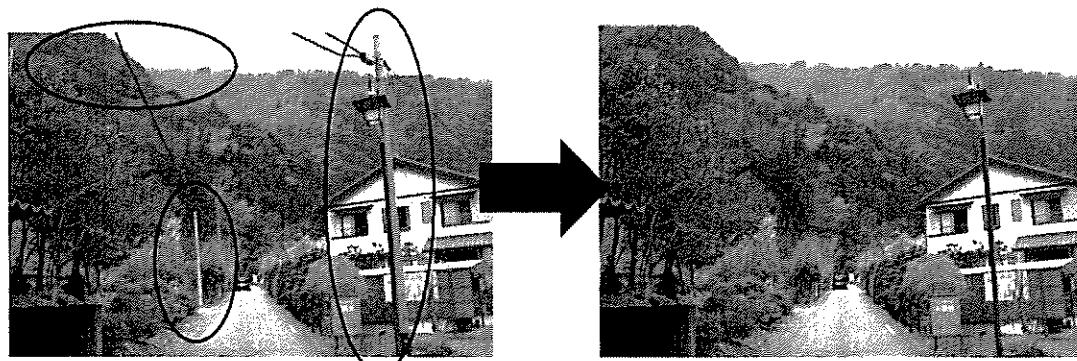
### (1)寸又峡夢の釣り橋

堆積物が露出しており、枯れ葉や流木が溜まっている。美しいダム湖の景観を損ねているため、堆積物を取り除く。



### (2)寸又峡温泉街

電線が山の紅葉と重なっており、電信柱が雑然とした印象を与える。電柱を地中に埋める



## ■調査を通してのまとめ

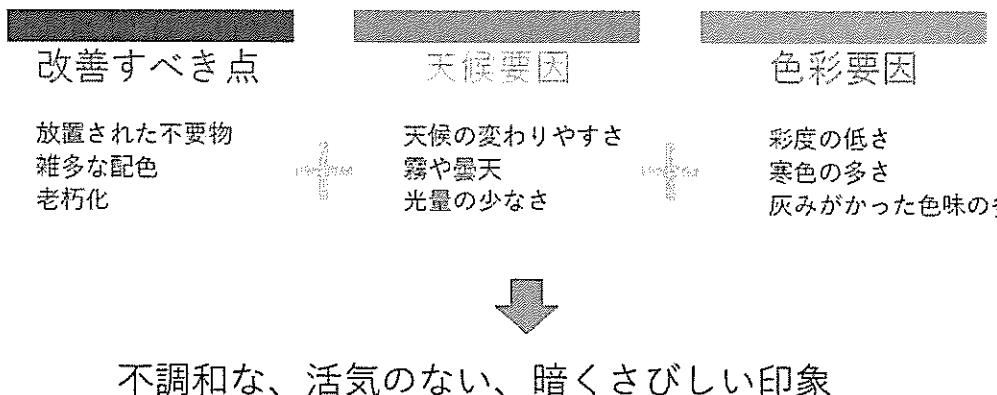
### ◎維持すべき点

- ・四季を感じられる美しい自然の風景
- ・山の中に茶畠がある光景やSLなどほかの地域にはない資源がある
- ・人間と自然が共生している様子が見られる

### ×改善すべき点

- ・老朽化していたり、清掃がされていなかつたりといった整備が不十分な箇所が多い。  
　　景観を壊しており安全上でも問題がある
- ・看板などの公共物のデザインが景観に適していない
- ・交通の不便さ。観光客が動きづらい
- ・情報発信不足。地域の魅力が外部へ伝わっていない
- ・建物などの彩度が低く、暗い印象を与える

現状の問題点として、寒色・控えめな色・くすんだ色の多さ、塗料劣化や配色配慮の不足の目立ちが、不調和な、活気のない、暗くさびしい印象を川根に与えていると推察する。



##### 5.提案内容、地域への提言

川根本町の目指す環境像は、川根本町環境基本計画(後期基本計画)が掲げる、“自然と共生する豊かなまち 川根本町～みんなが住みたくなる 癒しの里を目指して～”である。この環境増の実現のため、まちのイメージ創出を図る“色彩ガイドライン”の策定を提案する。

この色彩ガイドライン規制概念と定めることで、景観の調和を妨げる騒色の回避や、川根らしい色使いの推奨を実現させ、看板や広告デザイン、建築物などの物質的な要素を総合的に美しく統一感あるものにすることが可能である。

そこで、以下の3色を課題設定として掲げる。

##### ■川根らしいイメージ

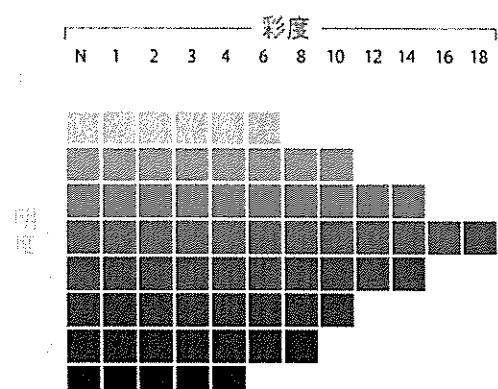
川根が持つ自然豊かな茶園、森林などのカラー

##### ■自然と文化の色彩の調和

建築物などの彩度の低く穏やかな色調に合わせせるカラー

##### ■ぬくもりを感じさせる

暖色の、暖かなぬくもりを印象として与えるカラー



目に入る景観は公共のものであることを意識し、配色の重要性の知識啓蒙、景観への配慮を推し進めていくことで、川根本町の魅力があふれる景観づくりを目指す。

# 成果報告書

## 高齢者の居場所づくりと学生ボランティア

静岡英和学院大学 人間社会学部 岡部真智子ゼミ

指導教員：准教授 岡部真智子

参加学生：若澤奈未、小林希衣、永田弥沙、八木あすか

### 1. 要約

本研究では、三島市でこれから高齢者向けの居場所を始める際の参考とするため、現在県内で行われている高齢者の居場所の実態や始める際の留意点、課題を調査し、居場所づくりのポイントの抽出を試みた。

### 2. 研究の目的

本研究では、県内の各市町で行われている高齢者の居場所づくりの実際を見学し、居場所の準備や開始の際の留意点、活動上の配慮等を聞き取り調査により把握する。そのうえで、三島市で今後行う高齢者の居場所づくりに参考となるポイントを明らかにする。

### 3. 研究の内容

- ① 県内で高齢者の居場所づくりを行う団体への聞き取り調査と活動の見学。
- ② 三島市光が丘地区での「住民参加型生活支援サービス普及セミナー・養成講座」への参加を通して、地域住民の意向を把握する。
- ③ 聞き取り調査の結果をまとめ、市の担当課職員、市社会福祉協議会職員、県社会福祉協議会職員へ発表し、意見交換を行う。

### 4. 研究の成果

#### (1) 当初の計画

- ① 県内の各市町で行われている高齢者の居場所づくりにおける準備や開始の際の留意点、活動上の配慮等を聞き取り調査により把握する。
- ② 調査結果を踏まえて、三島市の高齢者の居場所づくりを地域住民や学生ボランティアと一緒にになって行う。

#### (2) 実際の内容：B（一部修正）

- ① 高齢者の居場所づくりを行っている3団体の活動を見学し、運営者に活動の詳細や活動を始めるに至った動機、今後の課題について聞き取り調査を行った。3団体とは、熱海市県営七尾団地「七美クラブ」、静岡市市営有東団地「有明なごみ」、富岳館高校「寄り合い処太陽」である。さらに、富士宮市社会福祉協議会の協力を得て、寄り合い処を運営するスタッフ向けの研修会に参加させていただき、活動のポイント、留意点について把握を試みた。
- ② 当初、調査結果を踏まえて、実際に高齢者の居場所づくりを行う予定だったが、検討していた地区（光ヶ丘地区）において、社会福祉協議会が「住民参加型生活支援サービス普及セミナー・養成講座」を進めていたため、そこに参加し、地域住民の意向を把握することとした。
- ③ ①の調査結果を、三島市長寿介護課職員、三島市社会福祉協議会職員、静岡県社会福祉協議会職員に発表し、意見交換を行った。

### (3) 実績・成果と課題

#### ①高齢者の居場所の見学と調査

##### ア) 熱海市・七美クラブ

2016年11月11日に、熱海市七尾団地・「七美クラブ」を見学し、町内会長と社協職員に聞き取り調査を行った。七美クラブは、団地内で孤立死した方の身元確認のために町内会長が立ち会い、二度と団地内で孤独死を出したくないとと思う強い気持ちから始まった取組みである。開設やその後の活動には、市社協からのさまざまな支援を受けている。

七美クラブとは、団地内の集会所で常設型の居場所のことと、健康麻雀やカラオケ、体操など自由に活動が行われている。また季節に合わせたイベントも開かれている。常設型のため、住民の困りごとの声が寄せられやすい。

高齢化が進む七尾団地では、住民の見守りをするために、誰がどこのデイサービスを利用しているかといった一覧表や見守りマップを作成し、随時見直しを行っている。また七尾団地は近隣に買い物する場所がなく、買い物に不便な地域であるため、団地には週に2回のセブンイレブンの移動販売車、その他2社の移動販売車が来て、住民の買い物生活を支えている。団地内には住民が公園を改良して作ったグランドゴルフ場があるなど、住民の声をきっかけにしてはじまった取組みが少なくない。団地住民が高齢化していることから、若い大学生のような人に入居してほしいという意見が寄せられた。

(本調査の取組みは、熱海新聞（2016年11月12日付）に掲載された。)



写真1 七美クラブでの聞き取り調査の様子

##### イ) 静岡市・有明なごみ

2016年11月21日に、静岡市有東団地にある「有明なごみ」の活動を見学し、担当者に聞き取り調査を行った。

高齢化率が60%を超える有東団地では、もともと静岡市で行われているS型デイサービス（介護予防活動）や老人会があった。老人会未加入者がいるものの、町内会の助成金が老人会に使われることに疑問が生まれ、新たに常設型の居場所である「有明なごみ」を団地の一室で始めた。

活動内容はお茶を飲んだり、紙を使った作品作りをしたりと自由である。手先の器用な人が作品を作り、自分も作ってみたいと申し出た人に教えている。運営するボランティアは当番制で、S型デイサービスのスタッフが兼務していることが多い。毎週火曜日には福祉専門職による生活・介護相談会が開かれている。活動資金は作品の売上金や募金であり、活動場所の光熱費や作品の材料費に充てている。住民の高齢化から、後継者不足の問題があり、団地内に空き室も多いことから、学生に入居してもらい団地の活性化につなげたいという意見が挙げられた。



写真2 有明なごみでの聞き取り調査の様子

##### ウ) 富岳館高校・地域寄り合い処太陽

2016年11月16日に、富岳館高校の高校生が運営する「地域寄り合い処太陽」の活動を見学し、生徒や参加者から聞き取り調査を行った。

地域寄り合い処太陽は、毎月第3水曜日の11：00～12：15に、富岳館高校内の介護実習室で行われている。当日の運営はもとより、レクリエーション（ゲーム）の企画立案も福祉を学ぶ高校2、3年生が行っている。当日のプログラムは、あいさつ、ゲーム、お茶の提供、ゲーム、写真撮影、次回の案内であった。

地域寄り合い処太陽は、普段福祉を学ぶ高校生の実践の場になるだけでなく、地域住民との交流の機会になっていく。参加する方は高校がある地区の高齢者で、高校生の企画を楽しみにしている人も少なくない。参加者の中には仲良くなつた高校3年生に進路を尋ねるなど、関係が築かれた様子が見られた。夏休みには、高校生が自分の住む地区的地域寄り合い処に参加することもあるという。高校生の高齢者に対する思いはもちろんあるが、若者が企画する内容に興味を持ったり、若者の学習体験の役に立ちたいという参加者の思いが、この取組みを成立させているように思われた。

## エ) 地域寄り合い処スタッフ研修会

2016年11月16日に、富士宮市社会福祉協議会が主催する上野・柚野・稻子地区の地域寄り合い処スタッフ研修会に参加した。寄り合い処の活動内容やスタッフの役割、楽しむための工夫についての意見が交換された。

研修会の話から、それぞれの寄り合い処の始まり、運営の仕方はそれぞれで、住民の意向に任されていることが明らかになった。活動の頻度もさまざまで、町内会の関与が大きいところ、やる気のあるスタッフの意向に沿って行われるところ、参加者で話し合いをしながら活動内容を決めているところなど、それぞれに取組みが行われていた。社協職員からの聞き取りからは、それぞれの地域特性を踏まえて社協職員が時間をかけて働きかけを行い、地域寄り合い処が始まったこともわかった。

## ②三島市光が丘地区「住民参加型生活支援サービス普及セミナー・養成講座」への参加

本研究に取り組むにあたり、9月から三島市長寿介護課の担当者と打ち合わせを行い、高齢者の居場所を設ける場所として市内で最も高齢化率の高い「光ヶ丘団地」を選択した。光ヶ丘団地は県営団地、市営団地、戸建て住宅が混在する団地である。打ち合わせを進める中で、光ヶ丘団地では、市社協が地域包括支援センターと県社協と一緒に「住民参加型生活支援サービス普及セミナー・養成講座」を行うことを知った。新たに居場所を始めるよりも、この講座にともに参加することで、住民の意向を把握でき、住民が居場所を作る際の参考になるような材料が提案できるのではないかと考えた。

講座は3回シリーズで11月5日、12月3日、1月15日の3日間開催された。それぞれの内容は、11月5日：「地域の力



写真3 地域寄り合い処太陽での参加者への聞き取り調査の様子



写真4 地域寄り合い処スタッフ研修会の様子



写真5 住民参加型生活支援サービス普及セミナー・養成講座への参加の様子

を見つめなおす！」三島市北上地域包括支援センター細谷孝一氏によるセミナー。12月3日：寸劇・グループワーク「こんな時、あなたならどうしますか？地域の困りごとへの対応について考える」。1月15日：地域のシニアクラブの活動状況の報告、光ヶ丘一丁目町内会生活支援サービスの取組みの報告、川崎市にあるボランティアグループすずの会の鈴木恵子氏の講演、である。

第1回目のワークショップでは、住民から「自分ができること」として、人の話を聞くこと、小さな子どもの世話をされること、掃除や草刈りの手伝いができるなど意見が挙げられた。また「光ヶ丘のよいところ」として、景観が良いこと、あいさつがあること等が挙げられた。参加者は高齢者が多かったが、自分たちの生活をよりよくしたいというよりも、次世代にとって住みよいまちをつくりたいという声が寄せられていた。市内の芙蓉台団地すでに支え合いの取組みが始まっていることから、それに影響を受けて1丁目町内会では新たな活動が始まっていることも確認することができた。

### ③調査結果の発表と意見交換

1月25日に市社協において、市社協、長寿介護課、県社協の担当者に対し、県内の居場所3か所とスタッフ研修会の調査結果の発表を行った。各取組みの発表の後、光ヶ丘団地での居場所づくりの参考となると思われる7つのポイントを提案した。7つのポイントとは、⑦身近な場所で、かつ常設型の居場所があると情報が集まりやすい。①新たな人を呼び込むには、口コミが重要。⑦つながりをつくる機会（一緒に何かを行う、教え合う、話し合う、顔を出す）を大事にする。⑨ルールは緩やかに、自然の流れを大事にする。⑧幅広い年齢の人が参加できる機会にする。⑩参加しやすくするために、参加費は無料。⑪参加する側も、招く側も楽しいことが大事、である。その後発表への質疑応答、意見交換を行った。



写真6 市担当課職員、社協職員への調査結果発表の様子

## 5. 地域への提言

高齢者の居場所を開設する7つのポイントは前述したとおりだが、こうした取組みを始める前に、住民に地域の福祉課題に気付くような働きかけが行われることが重要である。熱海市や静岡市、富士宮市の取組みでは、市社協が住民の問題関心を高める働きかけをし、住民に合わせさまざまな支援を行っていた。今回、三島市光ヶ丘地区では「住民参加型生活支援サービス普及セミナー・養成講座」が開かれ、住民が自分たちのまちの現状を学び、考える機会ができた。こうした機会を生かしながら、居場所を行うかどうか検討することが望ましい。

また、光ヶ丘団地を始め住民の高齢化が問題視され、若い人に期待する声を多く聞いた。全国では、公営団地に大学生を住まわせ、支え合いのメンバーとしているところもある。福祉担当部局だけでなく、住宅担当部局やまちづくりの取組みと連携させながら進めることができることが、今後重要なことと思われる。

## 6. 地域からの評価

調査結果の発表会では、居場所を開く際の提案を興味深く聞いていただき、居場所の運営費の捻出方法などそれぞれの取組みに対する具体的な質問も行われた。また、大学生が地域に住み地域支援のメンバーになることについてどう思うかといった質問も寄せられた。今回、実際に光ヶ丘団地で居場所を開くことができなかつたが、光ヶ丘団地の地域の特性に合わせて、具体的かつ実効性があり、地域住民にとって魅力を感じられる居場所の提案ができれば、さらによかったと思われる。

## 浜松地域の多様な農産物を食材として活用し、「地産地食」の子ども食堂を通じて行う地域貢献

浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 渡部ゼミ（研究室）  
指導教員：教授 渡部いづみ  
参加学生：鈴木ステラ、藤丸力也、渡辺ジュニオル、  
蔵増慶太、小松原優介、徳井瑞樹、柳田千尋、その他、渡部ゼミナール3, 4年生

### 1. 要約

日本における子どもの貧困問題が注目されはじめて久しい。その数は6人に1人とも言われ、先進国の中では突出して相対的貧困状態にある子どもが多い。そのような中で、2013年には「子どもの貧困対策法」も成立した。教育、医療、家庭、地域と課題は山積しているが、まずは身近な場所である「地域」において、貧困対策として注目を集めている子ども食堂を学生が主体となって開催することを計画した。渡部ゼミでは、週に一度、学内で地元の野菜・果物を販売する「HGU朝市」を開催している。ここでは浜松地域の多様な農産物を扱っているが、この地元食材を子ども食堂の料理に利用することにより、地域の子どもや保護者に知ってもらい、地元農業への理解も深めてもらうという効果も期待した。

8月～12月までに3回の子ども食堂を開催し、40人余りの子ども達が参加した。学生においては、比較的豊かだと思われる当地域にも、保護を必要としている子どもが多数存在し、緊迫した状態にあるということを理解する機会となり、また、小さな活動でも他人の為にできことがあると実感できた貴重な経験となった。子ども食堂のマイナスイメージが定着しつつあり、参加者募集に非常に苦労したことも学びであった。

### 2. 研究の目的

- ①子どもの貧困対策として注目を浴びはじめている子ども食堂を開催することで、学生と子ども、地域と子ども、大学と子どもを繋げ、子どもの居場所作りのきっかけとする。
- ②浜松地域で生産される野菜や果物を使用し、学生と子どもが一緒に調理をして、共に食事をすることで、地元の多様な農産物の存在や美味しさを子ども達に伝える。（地産地食）
- ③学生が地域課題のひとつである子どもの貧困問題の深刻さを知ると同時に、自分達ができるサポートは何かを考えさせる機会とする。

### 3. 研究の内容

#### HGU子ども食堂+料理教室（第2回目よりHGU朝市食堂に名称変更）の開催

第1回 2016年8月17日 浜松市富塙協働センター 参加者15名（うち保護者2名）  
学生の調理時間13時～17時30分 子どもとの調理時間・食事時間17時30分～19時30分  
片付け19時30分～21時

メニュー 鶏肉とシメジの炊き込みごはん・やわらかジューシー煮込みハンバーグ・かぼちゃサラダ・さつまいもの濃厚ポタージュ・カルピスのもみもみシャーベット・本当にトロトロ牛乳ゼリー

第2回 2016年9月2日 浜松市新津協働センター 参加者16名

学生の調理時間13時～17時30分 子どもとの調理時間・食事時間17時30分～19時30分  
片付け19時30分～21時

メニュー 鶏肉とシメジの炊き込みごはん・やわらかジューシー煮込みハンバーグ・夏野菜とツナのサラダ・さつまいもの濃厚ポタージュ・カルピスのもみもみシャーベット・旬のくだもの（豊水・巨砲・ピオーネ・シャインマスカット）

第3回 2016年12月23日 浜松市白脇協働センター 参加者14名

学生の調理時間13時～17時30分 子どもとの調理時間・食事時間17時30分～19時30分  
片付け19時30分～21時

メニュー ポテトサラダdeクリスマスツリー・ローストビーフ・チキンクリームシチュー・  
バゲット・クロワッサン・食パン・クリスマスケーキ・シャンメリ

## HGU朝市食堂



子ども食堂の3回の開催を通して、地域内の地区によっても開催ニーズの違いがあることが解った。子ども食堂の社会的認知が進むことにより、子ども食堂＝貧困、孤食などのイメージが強く、保護者が参加を望まない実情があることが開催の大きな障害となった。その対策として、「料理教室」を同時に開催することでマイナスイメージの払拭を図った。参加者募集のため、広くこの活動を知ってもらう必要があり、学生がチラシを作成し、小学校や地域の商店を回ったが、あまり効果を得られなかった。保護家庭のことをよく知る地域の民生委員の協力で、最終的には定員を超える参加者を集めることができたが、今後は、保護者の理解、地域住民の理解などを促していく必要がある。

#### 4. 研究の成果

- (1) 8~9月の間に3回開催予定。
- (2) B 第3回目のみ12月の開催となった。

(3) 参加した子どもや保護者、協力者である民生委員や保護家庭に関わる人達からは、子どもが非常に喜んでいたと好評を得た。定期的な開催を求められたが、資金、学生のスケジュールなどの問題で、現段階では断らざるをえなかった。

(4) 「子ども食堂」に対する保護者の偏見があるため、2回目からは「HGU朝市食堂」と名称を変えて開催した。子ども食堂＝貧困、孤食という偏見をなくし、利用したい人が気軽に利用できる仕組み作りをする。(料理教室や寺子屋などと同時開催等)

5. 子どもの貧困や孤食は、政令指定都市である当浜松市でも他人事ではなく、確実に地域の課題となりつつある。温かい食事をみんなで一緒に食べるという当たり前の生活を手にできない子どもが、この地域にも存在するという事実を、地域社会に住む大人も大学生も知る必要がある。行政や大きな組織に頼るのではなく、自分達で何かできることは何かという自主性が問われる社会の中で、大学や学生が積極的に地域コミュニティとしての「場」を作っていくことが求められている。

6. 子ども食堂の開催については、民生委員や協働センターからは、非常に評価して頂いた。しかし、希望の多かった子ども食堂の定期的な開催や保護家庭の子どもに対する「学習支援+食事の提供」などは、記録用写真の撮影などは一切不可という子どももあり、大学生の活動として行うのには、工夫が必要である。

## 浜松市天竜区水窪町における民間口承文化財（昔話）の採録調査

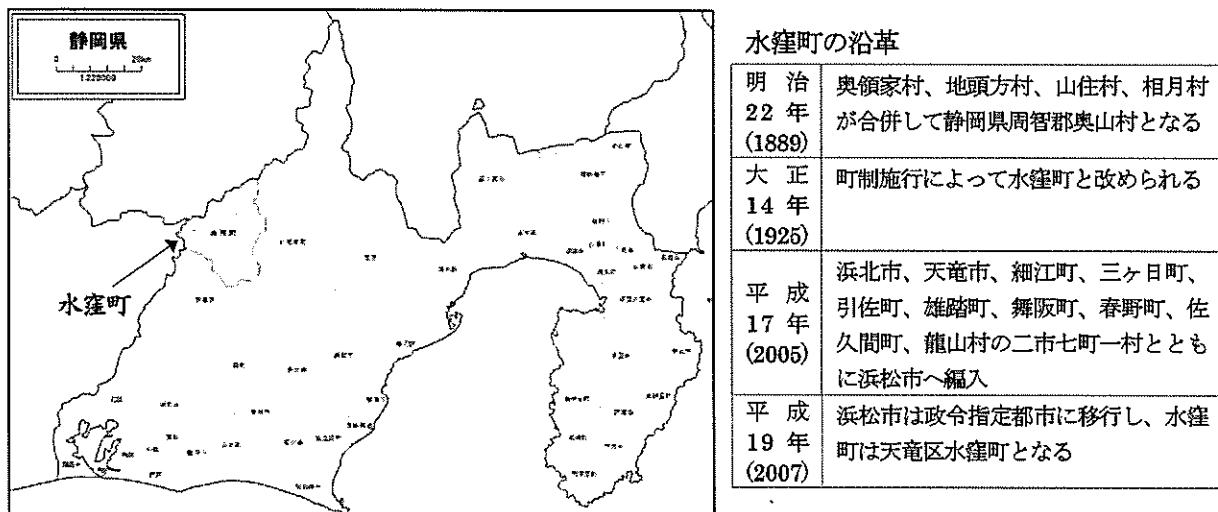
静岡文化芸術大学 文化政策学部 二本松康宏ゼミ

指導教員：教授 二本松康宏

参加学生：佐藤妃莉・下川知沙子・羽石誠之助・東美穂・平手結花・山本かずひ

### 1. 要 約

静岡文化芸術大学 文化政策学部 二本松康宏ゼミでは、2014年度からの3ヶ年計画により、浜松市天竜区水窪町における民間口承文化財（昔話）の調査・採録を進めてきた。本課題はその3年目（最終年次）にあたる。採録した昔話は「方言のまま」「語り口調のまま」に翻字・記録する。そのなかから資料的価値・学術的価値を検証・精選し、伝承地域等の解説を書き添えて、書籍として刊行する。



世帯数：1,110 世帯

人口：2,206 人

65歳以上の人口：1,250 人

高齢化率：56.66%

(平成 28 年 10 月 1 日の住民基本台帳より)

### 【参考】2014年度（1年目）の成果



#### 『水窪のむかしばなし』

二本松康宏監修、植田沙来・内村ゆうき・野津彩綾・福島愛生・山本理沙子編著、三弥井書店、2015年3月、A5版、150頁、定価1,080円

### 【参考】2015年度（2年目）の成果



#### 『みさくぼの民話』

二本松康宏監修、岩堀奈央・植木朝香・末久千晶・鷹野智永・久田みづき編著、三弥井書店、2016年4月、A5版、158頁、定価1,080円

## 2. 研究の目的

### 昔話の採録と調査・研究の現状

日本各地の山間地域では極端な高齢化と過疎化が進み、かつてのように昔話を語り伝える人々は急激に減少している。1970年代後半から1990年代前半にかけては現在の日本昔話学会の前身となった昔話研究懇話会等を拠点として、國學院大学や東洋大学、関西では立命館大学、関西外国语大学、京都女子大学、大谷女子大学などにおいて、ゼミや研究会による組織的かつ本格的な昔話の採録調査が展開され、調査報告書の公開が相次いだ。しかし2000年頃から、そうした調査がきわめて困難になったといわれる。それには以下のような事情が指摘されている。

- ・昔話の語り手の減少

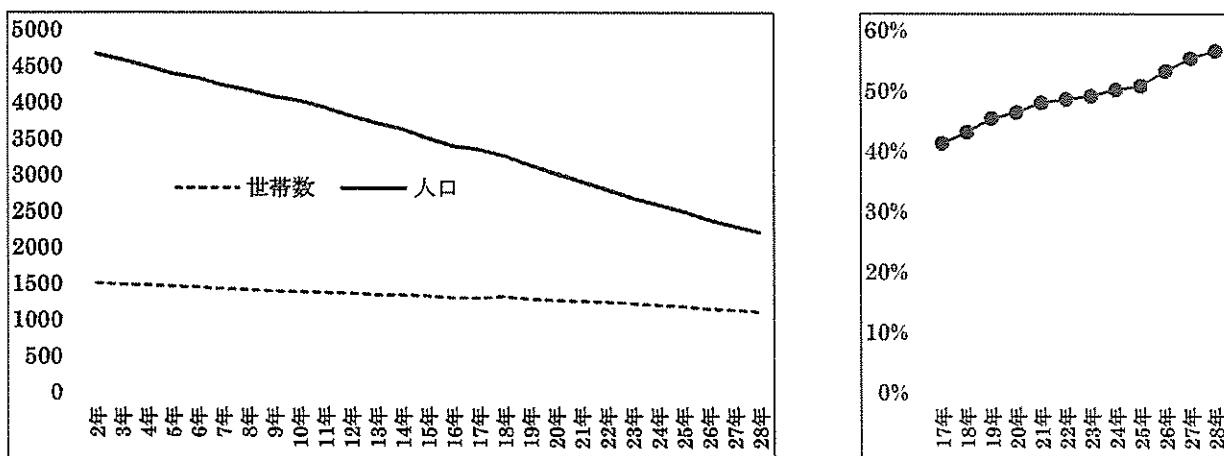
現在の「高齢者」と呼ばれる世代の大半は、戦後の高度経済成長を支え働いてきた人たちであり、昔ながらの昔話を語るような「おじいちゃん」「おばあちゃん」ではなくなった。

- ・少子化の影響 → 語りの場の消滅

とくに山間地域では極端な少子化が進み、孫と同居する高齢者が減ったため、高齢者は自分の孫に昔話を語る機会がなくなった。

【資料1・左下】水窪町の人口と世帯数の推移（平成2年～平成28年）

【資料2・右下】水窪町における高齢化率の推移（平成17年・浜松市への編入合併～平成28年）



【資料3】浜松市立水窪小学校の児童数、同水窪中学校の生徒数児童数（平成28年5月）

水窪小学校						水窪中学校				
1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	1年生	2年生	3年生	特別支援	
5	3	8	9	6	7	7	9	11	1	
38						28				

### 水窪における昔話の伝承状況

昭和5年に折口信夫が「西浦の田楽」を東京に紹介して以来、水窪は民俗の宝庫と謳われてきた。しかし昔話については、これまでに本格的な採録調査はなされていなかった。そこで私たちは2014年度からの3ヶ年計画で水窪町における昔話の採録調査を開始した。これまでの採録調査において、現代では稀有とも言うべき優れた語り手の存在が確認され、水窪には昔話の語りがからうじて伝承されていることがわかつってきた。この調査は水窪の地域と家系に根差して語り継がれた口承無形文化財を発掘し、その記録と保存、および公開を目的とする。語り手たちの高齢化を慮ると極めて緊急的な課題である。

### 3. 研究の内容

- 2014年4月からの3ヶ年計画で水窪町全域での昔話の採録調査を実施してきた。その3年目にあたる2016年度は、水窪町の市街地である神原、小畑を中心として、前期(5月～7月)に5回(のべ8日)の採録調査、後期(8月～1月)には計22日におよぶ補足調査を行った。
- 65名から話を聴き、昔話57話、伝説72話、世間話49話、言い伝え12話、計190話を採録した。
- 採録した昔話は学術上の位置付けや記録価値などを精査したうえで、「方言のまま」「語り手の語り口調のまま」に翻字・記録する。伝承の解説を書き添え、書籍として刊行する。口承文化の保護・保存と継承、公開、普及を目的として、刊行に際しても「方言のまま」「語り手の語り口調のまま」を重視する。

**【資料4】自治会ごとの世帯数と人口**

(2015年4月1日現在) 資料提供：水窪協働センター

自治会	世帯数／人口	調査年度		
		2014	2015	2016
水窪(本町)	90／206		○	
神 原	270／567			○
小 畑	315／616			○
竜 戸	49／100		○	
長 尾	42／93		○	○
西 浦	65／145	○	○	○
草 木	12／19	○		
大 野	24／38	○		
門 谷	5／8	○		
向 市 場	94／203		○	
上 村	37／68	○		
向 島	39／76	○		○
門 桓	32／43	○		

↓ 5月21日(土) 林業体験研修施設「田楽の里」



↓ 5月22日(日)「水窪協働センター」2階和室



**【資料5】2016年度 調査記録**

集団…集団採録 個別…個別採録 挿足…挿足調査

5月21日(土) ～22日(日)	集団(西浦) 集団(神原)、個別(神原)
6月4日(土)	個別(神原、西浦)
6月18日(土) ～19日(日)	個別(向島) 集団(小畑)、個別(小畑、神原)
7月2日(土)	個別(西浦、神原)
7月16日(土) ～17日(日)	個別(長尾、向島) 個別(西浦、小畑、神原)
8月8日(月)	挿足(小畑・向島) 佐藤・山本
8月9日(火)	挿足(向島) 佐藤・山本、(小畑) 下川・羽石
8月26日(金)	挿足(小畑) 平手
8月30日(火)	挿足(小畑、神原) 下川・平手
9月11日(日)	挿足(西浦) 東・平手
9月25日(日)	挿足(神原) 下川
9月30日(金)	挿足(向島) 佐藤・山本
10月9日(日)	挿足(小畑) 平手
10月10日(月)	挿足(神原) 下川
10月15日(土)	挿足(神原) 下川
10月16日(日)	挿足(向島) 佐藤・山本
10月17日(月)	挿足(小畑) 東
10月23日(日)	挿足(小畑) 平手
10月30日(日)	挿足(神原) 下川
11月14日(月)	挿足(向島) 山本
11月21日(月)	挿足(神原) 下川
12月3日(土)	挿足(神原) 下川
12月6日(火)	挿足(向島) 佐藤・山本
12月11日(日)	挿足(西浦) 平手
1月15日(日)	挿足(神原) 下川・羽石・山本
1月21日(土)	挿足(神原) 下川・東
1月22日(日)	挿足(神原) 下川・羽石

#### 4. 研究の成果

##### (1) 当初の計画

小畠、神原、西浦、長尾、向島の5地区において集会所等での集団調査および個別訪問による採録調査を実施。採録した昔話は学術上の位置付けや記録価値などを精査したうえで、「方言のまま」「語り口調のまま」に翻字・記録する。伝承解説を書き添え、書籍として刊行する。

##### (2) 実際の内容とその理由

A (予定どおり)

##### (3) 実績・成果と課題

2016年度の成果として『みさくぼの伝説と昔話』(二本松康宏監修、佐藤妃莉・下川知沙子・羽石誠之助・東美穂・平手結花・山本かむい編著、三弥井書店、2017年3月、定価1,080円)を刊行予定。

##### (4) 今後の改善点や対策

水窪町での民間口承文化財(昔話)の調査・採録は本年度をもって完了する。2017年度からは2ヶ年計画により浜松市天竜区龍山町において調査・採録を開始する予定である。

水窪におけるゼミの活動と地域の特産品である雑穀餅のPRのために、学園祭(碧風祭)において「水窪の雑穀餅」を出店。「静岡新聞」「中日新聞」「朝日新聞」「FMハロー」「浜松ケーブルテレビ」等にて紹介される。



「静岡新聞」2016年11月4日朝刊

#### 5. 地域への提言

昔話は地域と家庭に伝えられた心の文化遺産である。しかし水窪における民間口承文化財(昔話)は語り手たちの高齢化と急速な過疎化に伴って、いまや風前の灯火ともいいくべき状況にある。しかしながら、これまでの採録調査によって、古い方言のままに昔話を語ることができる非常に優れた語り手たちも見出されている。そこで、調査によって見出された優れた語り手については、たとえば小学校や中学校において児童・生徒たちに昔話を語るような機会を設けてはどうだろうか。生きた方言とともに地域の口承文化財が継承されることも期待できるだろう。それは世代を超えた地域文化の継承のためのコミュニケーション・ツールにもなり得る。あるいは語り手が大勢の人前で話すことを好まないならば、少なくともその語りの様子を映像資料に収めておく(アーカイブ化)ことも必要であろう。地域に伝承された口承文化財の保護と記録、そして公開と継承について考えるべきときではないか。

※ 近年では「語り部」を称して小中学校や公立図書館などで昔話を語り聞かせる活動も広まっているが、そうした活動では子どもにもわかりやすく標準化され、再創作された話が大半を占めている。昔話を地域と家庭に伝えられた心の文化遺産と考えるならば、そのような創作を地域の昔話と称して子どもたちに語り聞かせることは、文化の保護・保存と継承の観点から再検討されるべきかと思われる。

#### 6. 地域からの評価

本ゼミの水窪における昔話の採録調査と書籍の刊行は、静岡新聞、NHKなどをはじめとして報道・メディア等にもしばしば紹介されてきた。ゼミの学生がラジオに出演して昔話を読み語りすることもある。学生を編著者とするこうした書籍の刊行は、たしかに期待と注目を集めやすい。しかし、私たちが「出版」という公開のかたちにこだわってきたのは、そうした可視的な成果を求めてのことではない。私たちの調査の成果を一過性のものとして終わらせないためである。前々刊『水窪のむかしばなし』は600部を発行し、すでに完売となっている。前刊『みさくぼの民話』も同じく600部を刊行し、出版社によれば残部は僅かと聞いている。それらの大半は静岡県内で購入されているらしい。売れているだけではない。『水窪のむかしばなし』は静岡県内の公立図書館9館、浜松市立図書館では8館に開架されている。『みさくぼの民話』は静岡県内の公立図書館14館、浜松市立図書館では16館に開架されている。私たちの活動は「この書籍を手に取り、読んでいただく」というかたちで、地域と市民の皆様からの御支持とご期待、ご声援をいただいていることを肝に銘じている。

## (別紙) 成果報告書

### 「富士宮緑茶ブランド化のためのオリジナル商品企画開発」に関する研究

常葉大学 経営学部 安達ゼミ

指導教員：教授 安達明久

参加学生：平井、矢後、伊東、杉澤、青島、方、張

#### 1. 要約

①富士宮の緑茶は、生産量が少ないとことから、知名度が極めて低く、そのブランド力形成、向上が重要な課題となっている。本研究では、富士宮市内の緑茶栽培農家若手有志24者により結成された富士宮富士山製茶合同会社と共同し、富士宮周辺地域の特徴ある食材等と組み合わせたオリジナル緑茶商品等を企画開発した。本取組みは、常葉大学経営学部安達ゼミ3年生が中心となり平成26年度から開始したもので、本年度で3ヶ年目を迎える。本活動に当たっては、緑茶の新しい飲み方提案に定評のある東京日本橋に拠点をおく茶商（株）おちやらか）のほか、（株）田子の月など地元企業等と連携しつつ商品開発等を実施。

②具体的な商品企画等は、連携先等のアドバイス・指導を受け、次のプロセスによる取組みを行った。

- ・平成26・27年度：緑茶製品等を販売するアンテナショップ基本コンセプト案提示
- ・平成28年度：「ストーリー性」を基本要件とし、富士宮緑茶とコラボできる富士宮地元

特産品を利用した和菓子の企画案の提示

- 7月 (株)田子の月とのワークショップ（2回）
- 10月 富士宮地区の特産品調査（1回）
- 11月 (株)おちやらかとのワークショップ（1回）
- 12月 緑茶アンテナショップ先行事例調査（1回）
- 1月 上記を踏まえた緑茶商品企画案の提示

③本研究の取組みの成果（28年度）は、次の2点である

- 28年9月：我々が提示した基本コンセプトを取り入れたアンテナショップ開店
- 29年1月：上記アンテナショップで販売する商品企画案4件提示、うち2件採用。アンテナショップでの試験販売決定（平成29年3月予定）

#### 2. 研究の目的

富士宮市は日本的一大緑茶生産地である静岡県にありながら、その生産量（2013年：県内市町村別生産量ランクは19市町村中16位）とブランド力において極めてマイナーな地位に甘んじている。

この様な富士宮の緑茶産業の現状を開拓するため、2014年1月に地元緑茶生産農家の若手有志24者の共同出資により「富士宮富士山製茶合同会社」（以下、単に「製茶会社」という。）が結成され、富士宮緑茶を世界ブランドにする共同企画販売の取組みが開始された。

本プロジェクトは、この様な地域企業の取組みを学生の視点と発想で支援すること、さらには、取組みを通じて学生自身も地域活性化や商品企画に関する実際知識の深化蓄積を図ることを目的として、常葉大学経営学部（富士キャンパス）の安達研究室と製茶会社が中心となり、富士宮市をはじめ地元の農協、広告企画会社、和洋菓子店とも連携しつつ2014年度から取り組んでいる産官学連携の地域活性化のプロジェクトであり、本年度はプロジェクトの3年目にあたる。

#### 3. 研究の内容

本取組みは、常葉大学経営学部安達ゼミ3年生が毎年中心となり活動を行っており、活動にあたっては、富士宮の製茶会社のほか、緑茶の新しい飲み方提案に定評のあり東京日本橋に拠点をおく茶商（株）おちやらか）、地元大手和菓子会社（株）田子の月、洋菓子店デマンシュマタンに加え、地元特産物販売店であるJA富士宮ファーマーズマート、朝霧高原道の駅、さらには商品開発の専門家である（株）アドライン等との連携し、そのアドバイス指導を受けつつ活動を行った。具体的な取組みのプロセスは、次の通りである。

平成26年度：緑茶産業の現状等、および商品開発手法に関する基礎調査

- 5月 新茶摘み体験
- 6月 商品開発、ブランド化に関する地元広告企画会社による講義
- 7月 商品開発プロセス体験（富士宮緑茶を利用したスイーツ企画案提示）
- 8月 上記で提示したスイーツ2種のJ A富士宮ファーマーズマートにおける試験販売
- 10月 緑茶産業の現状、課題等の文献調査
- 12月 富士宮緑茶ブランド化に向けた各種ブランドショップ事例調査
- 1月 富士宮緑茶のブランド化に関する基本コンセプト案の提示

平成27年度：緑茶製品等を販売するアンテナショップ基本コンセプト案画提示

- 5月 新茶摘み体験および地元名産品販売施設（朝霧高原道の駅）訪問調査
- 7月 緑茶産業の現状、課題等の文献調査
- 8月 アンテナショップの先行事例調査（長野市善光寺；蔵の街）
- 10月 同上 （三島市大社の杜等）
- 12月 アンテナショップ基本コンセプト提示のための各種ブランドショップ事例調査
- 1月 富士宮緑茶のブランド化に関する基本コンセプト案の提示

平成28年度：「ストーリー性」を基本要件とし、富士宮緑茶とコラボできる富士宮地元特産品を利用した和洋菓子のオリジナル商品の企画案提示。さらに、採用された商品のアンテナショップでの試験販売。（詳細は後述）

#### 4. 研究の成果

3ヶ年に亘る本活動全体の成果は、次の通りである。

- ① 富士宮緑茶のブランド化のための基本コンセプトの提示（富士山、地元特産品の活用）
- ② 富士宮緑茶のアンテナショップ企画案の提示（門前町型、再開発一体、複合型）
- ③ 地元特産品を利用し、かつストーリー性のある緑茶関連スイーツの企画提案（4品目）と、アンテナショップにおける試験販売（29年3月実施決定）

以下では、平成28年度の成果である上記③に関する具体的な内容について、記述する。

##### (1) 当初の計画

当初計画においては、常葉大学経営学部安達ゼミ年生が中心となり次の2点の活動を想定していた。

- ① 富士宮富士山製茶合同会社、さらには地元広告企画代理店で商品企画の専門家である（株）アドラインと共に、富士宮緑茶を利用したオリジナル商品の企画開発を行うこと。その際、富士市大手和菓子企業や、富士宮市内の高級レストラン、地元畜産農家が経営するジェラート店とも連携し、緑茶と相乗効果の高いオリジナル商品の組合せの提案を行うこと
- ② 富士宮富士山製茶合同会社が今8月に開店を予定しているアンテナショップにおいて、実際に企画商品を試験販売し、検証と改善を実施すること。

##### (2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）

当初計画の主要項目3項目の実施状況は、次の通りである。

- ① オリジナル商品の企画開発 : A ほぼ予定通り
- ② アンテナショップにおける上記商品の試験販売 : B 一部修正（遅延）  
実施時期を平成28年12月と想定していたが、実際には商品開発の基本コンセプト（ストーリー性）に関する検討が遅延したことから、商品企画案提示が遅れ、試験販売の時期も平成29年2月に延期となった。

##### (3) 実績・成果

平成28年度における活動実績・成果は、次のとおり。本活動の成果としては、商品企画の専門家、実務家の指導のもと、「ストーリー性」「地元資源活用」という統一した商品コンセプトを前提に、学生

ならではの視点を活かし、具体的なオリジナル商品を4件提示、そのうち2件が実際の試験販売に至ったことが、最も重要な点であると考える。

平成28年4月 商品企画のノウハウ修得のため、3キャンパスが連合した(株)スシローとの共同新商品開発プロジェクトに参加

6月 ブランド化、オリジナリティに関する成功事例等の文献調査（中川政七商店、ボジョレーヌーボー他）

7月 (株)田子の月との新和菓子開発に関するワークショップ（2回）



9月 富士宮富士山製茶合同会社が開設したアンテナショップ見学（1回）



10月 富士宮地区の特産品調査（1回）

11月 (株)おぢやらかとの地元特産品と緑茶のコラボに関するワークショップ

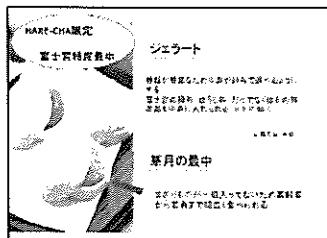


12月 緑茶アンテナショップ先行事例調査（1回）

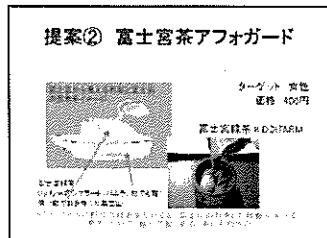
平成29年1月 上記を踏まえたオリジナル商品企画案（4件）の提示、および2件のアンテナショップにおける試験販売決定（平成29年3月予定）

本プロジェクトにおいて、学生が提示したオリジナル商品は、次の4点である。

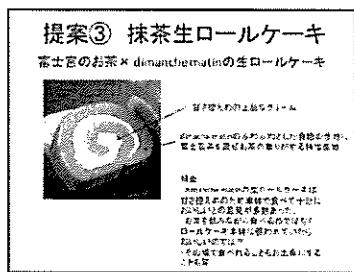
(提案1)



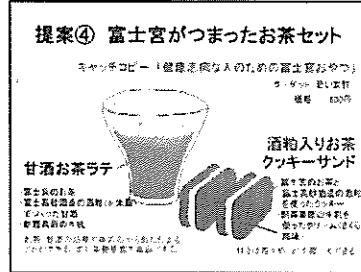
(提案2)



### (提案3)



### (提案4)



#### (4) 今後の課題、改善点や対策

今後の課題の第1点としては、「地元資源活用」という考え方は、計画当初から想定していたものの、それを具体的にどの様な形で生かしオリジナリティを生み出すかという点で、具体的な手法を構築することに時間を要した点が指摘できる。この点については、地元和菓子メーカーである田子の月、東京の茶商おぢやらかとのワークショップでの知見が大いに役立った。

第2の課題としては、上記の具体的手法の設定が遅延したこともあり、実際の商品企画提案が1月にずれ込んだこと、また、活動の主体となる3年ゼミ生の大学での試験期間等との関係もあり、当初12月に想定していた商品の試験販売が年明3月に延期となってしまった点が指摘される。プロジェクトの関連するノウハウを有する専門家の確保、学生の年間スケジュールを前提とした効率的な活動計画の設定などが今後の重要な課題であると考える。

## 5. 地域への提言、発信および地域からの評価

今回の3ヶ年を通じた活動に基づいた地域、ないしは地元連携先（富士山富士宮製茶合同会社）への提言は、次の諸点である。

① 既存市場においてマイナーな存在であっても、特徴・強み、およびストーリー性を明確にすることにより、独自のブランドを構築し、成功した事例は多く存在する（例 中川政七商店、ボジョレーヌーボー等）

② 上記の観点から、富士宮緑茶のブランド化を行うにあたっては、次の諸点が非常に重要であることが指摘できる。

- ・「富士山」「浅間大社」「朝霧高原の乳製品等」「富士宮の伝統から生まれた和菓子、日本酒等」が富士宮の重要なオリジナリティであり、これらの関連商品と富士宮緑茶がコラボすることにより、「ストーリー性」のあるオリジナル商品を開発することが必要である。
- ・富士宮緑茶のアンテナショップにおいても、これらオリジナル商品の販売を核として、浅間大社を中心とする再開発との「一体性」の確保、上記の地元特産品販売との「複合施設化」が重要である。

これらの提言については、平成28年9月に開設した緑茶アンテナショップにおいては、各種の制約のためショップ単独での立地となったもの、我々の提示した多くのコンセプトが採り入れられたほか、同ショップで販売されている緑茶商品のパッケージにも活用されるなど、連携先である富士宮富士山製茶合同会社から高い評価を得ることができた。また、本活動に参加した安達ゼミ生が、その取組を評価され、本活動に関心を示していたJA富士宮の職員として採用されるなど、地元関係者からも評価を得ている。また、本活動については、常葉大学が主催する学生自主企画プロジェクトの学内報告会において、平成27年度優秀賞を獲得している。

なお、本活動については、下記の形で学外にも発信を行っている。

：平成28年12月28日に和泉出版より公刊された『産学連携—その実践と拡大に向けて』に活動内容を掲載

「第1章 富士宮の緑茶を世界ブランドにするプロジェクト」執筆者 安達明久ほか

：平成29年1月18日に常葉大学が主催開催した「産学連携シンポジウム」において、本プロジェクトの概要発表

以上

## 保育所ボランティアに求められる専門性についての研究

常葉大学 保育学部 山本睦ゼミ（研究室）

指導教員：准教授 山本睦

参加学生：長澤絵里花、石川愛子、糸川まなえ、

加本紗奈恵、戸田真咲、望月千鶴、

森川夏帆、森本大地、杉山健人、

石井晴奈、勝又瑞紀、木川素代香、

鈴木亜紗美、関根愛梨、貫名みなみ、

早川紗季、横内果歩

### 要約

厚生労働省(2016)は待機児童が解消されない理由が「保育士不足」だと推測している。そこで厚生労働省(2016)は、この保育士不足を解消するために「子育て支援員」という無資格者を簡易的な研修のみで保育現場へ配置することを決定した。

しかし、これにより保育の質の低下や専門性の低さから保育現場での事故などにつながることが推測できる。

そこで、私たちは無資格者の保育活動の問題点について明らかにするため、質問紙調査とインタビュー調査の2つの手法を用いて保育者を対象に調査を行った。しかし、調査を行った2市では「子育て支援員」制度を現段階では採用していなかったため、無資格者を職場体験の中高生と保育者養成校の実習生と捉え、調査を行った。

質問紙調査の結果、保育者が無資格者に対して困ったことがあると厳しい評価になるが、そうでないときは甘い評価になっている傾向が見られる。また自由記述に注目すると、保育者も学生も仕事をどこまで任せていいいのか、どこまでやってよいのかわからず、曖昧な状態になっていることがわかった。そして、インタビュー調査の結果からは無資格者に対し保育の補助としてならよいが、責任の面を考えると任せられないという結果となった。このことから、無資格者が現場に入ることで保育者の負担が大きくなると考えられる。改善策として、園内に無資格者を指導・管理する管理職を設置するなど保育者にかかっている負担を改善する仕組みを提案する。

### 研究の目的

本研究では、質問紙調査とインタビュー調査の2つの手法を用いて無資格者の保育活動の問題点について明らかにするため調査を行った。しかし、調査を行った2市では、この「子育て支援員」制度を現段階では採用していなかったため、無資格者を職場体験の中高生と保育者養成校の実習生と捉え、以下の2点について調査を行った。第1に、保育を行うにあたって必要な専門性を明らかにするために質問紙調査を行った。第2に、無資格者の保育参加による現状や問題事例を明らかにし、ボランティアに問われる専門性を把握するため、インタビュー調査を行った。また無資

格者が現場に入ることに対する現場の考え方を明らかにするため、「子育て支援員」についてのインタビューも行った。以上を通して、無資格者が現場に入ることに対する保育現場の現状を明らかにし、さらに問題点についての改善策を検討する。また、今後「子育て支援員」が取り入れられことになった場合を想定して、保育者の負担を軽減できるようなシステムを提案していくことを目的とする。

### 研究の内容

各研究課題の調査概要は以下の通りである。

#### 1.質問紙調査

【対象】連携型認定こども園・保育所に勤務する保育者 43 名

【時期】2016年8月下旬に質問紙を配布し、同年9月下旬に回収した。回収率は2市ともに100%であった。

【質問紙評価項目決定までの手続き】質問紙項目には主に次の2つを測定するために先行研究を参考に作成した。無資格者が保育現場に入る際に、園に勤務する保育者が無資格者に対し、どのような仕事領域を、どのような程度で求めているかを測るために a.「無資格者に求められる専門性」16 項目、実際に無資格者が保育現場に入る様子や与えられる仕事内容を測るために b.「無資格者の実態」17 項目を使用した。これらの質問項目を項目ごと、1~5までの5段階評価で回答してもらい、統計処理により分析を行った。

質問項目は以下の文献を参考に作成した。

「保育実習生受け入れ保育園の問題意識(中村,2004)」

「保育現場が求める実習生像の分析(池田ら,2010)」

#### 2.インタビュー調査

【対象】連携型認定こども園・保育所に勤務する園長・主任 12 名

【時期】2016年10月上旬から10月下旬

【データ】プロトコルユニット数 2,654 の記述データを収集した。

### 研究の成果

#### (1) 当初の計画

調査日程は Figure1 の通りである。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
	関連文献 読み込み	申請書作成	調査準備			調査・分析		
第2章 質問紙調査			質問紙作成	➡	質問紙印刷	質問紙配布 回収	分析	➡
第3章 インタビュー調査				調査項目決定	調査練習	調査・分析		➡
	12月	1月	2月	3月				
	報告書作成	報告書完成	報告会練習	報告会				
第2章 質問紙調査								
第3章 インタビュー調査								

Figure1 調査日程

## (2) 実際の内容

予定通り調査を実施することができた。

## (3) 実績・成果と課題

2016年12月に行われた「富士山麓アカデミック＆サイエンスフェア2016」において、「無資格者の保育活動の問題点: インタビュー調査から」最優秀賞を受賞。「無資格者の保育活動の問題点: 質問紙調査から」優秀賞を受賞。

## (4) 今後の改善点や対策及び地域への提言

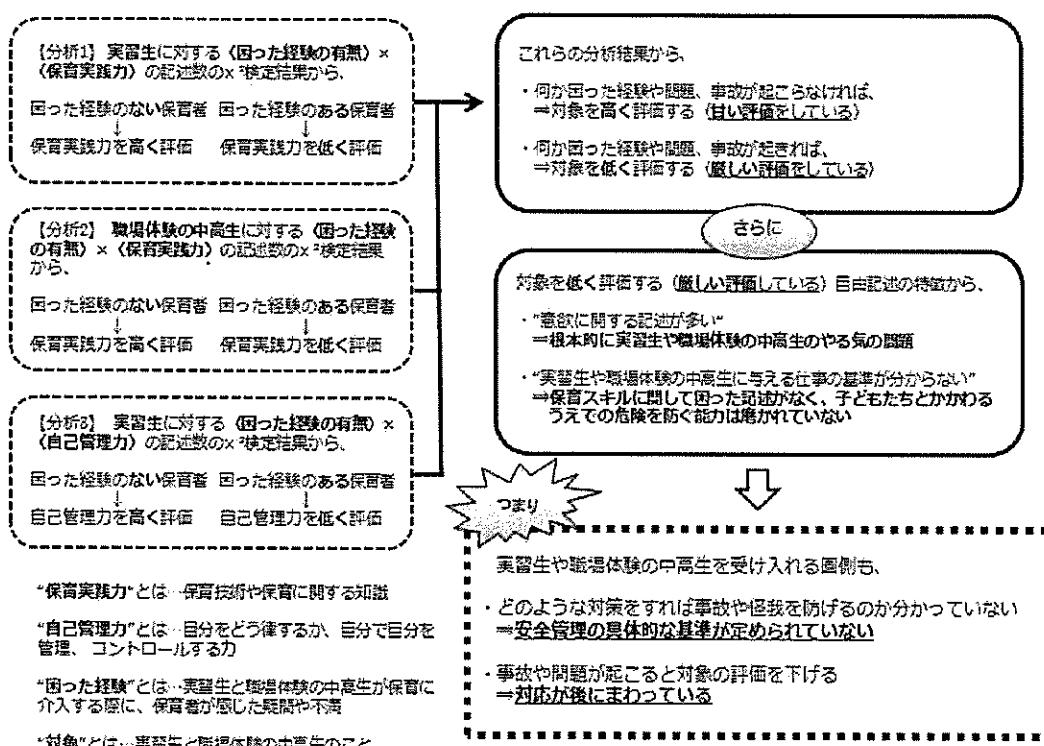


Figure2 質問紙調査から得た無資格者に関する現状の問題点と対策

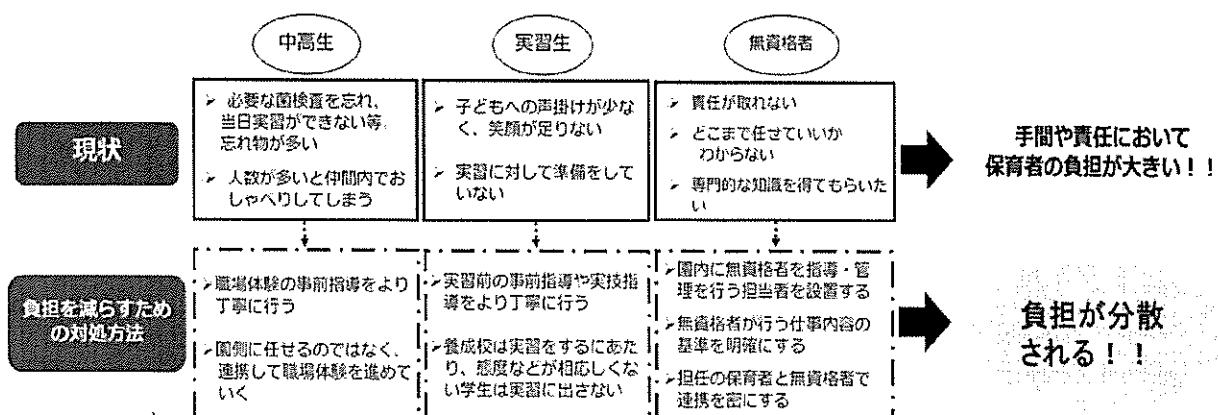


Figure3 インタビュー調査から得た無資格者に関する現状の問題点と対策



ポスター発表の練習



倫理的配慮の練習



A&S の発表の様子



#### 地域からの評価

フィードバック方法として、2月中に調査にご協力して頂いた、連携型認定こども園・保育所に調査報告書を送付する。

3月上旬裾野市にて、園の先生を招き、報告会および保育者不足についての検討会を実施予定。

#### 引用文献

厚生労働省 2016 待機児童解消に向けた現状と取組(厚生労働省資料)

<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisaku-2016/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumu-ka/0000137860.pdf> (2016年11月3日閲覧)

中村博武 2004 保育実習生受け入れ保育園の問題意識 プール学院大学研究紀要 第44号 pp.133-150.

池田幸恭・伊瀬玲奈・岩崎淳子・大神優子・北村裕美・駒久美子・佐野裕子・島田由紀子・眞鍋久  
美好・鈴木みゆき・高梨一彦 2010 保育現場が求める実習生像の分析 和洋女子大学紀要  
第50集 pp.177-186.

鎌原雅彦・大野木裕明・宮下一博・中沢潤 1998 心理学マニュアル 質問紙法 北大路書房